

『韻鏡』 「開合」 臆解 (補)

太田 斎

1. 真、諄分韻についての補足・訂正

「『韻鏡』 「開合」 臆解」(以下、「前稿」)に於ける推論の展開の中で、臻撰についての以下の記述は慎重さを欠くものであった。

『韻鏡』で唇音が真/諄の諄韻ではなく、真韻に配されるのは、この「ルール」を敷衍して考えれば、所拠切韻系韻書テキストが開合分韻されていないものだったということになる。但し欄外の韻目には「諄」も現れるから、この「諄」は後の改訂で、分韻されたテキストを参照することで「真」がかく改められたと想定せねばならない。

(p.7)

そこで補篇(即ち本稿)ではこれについて説明を加え、失考として捨て去るには及ばないことを論じる。

切韻系韻書の中で真韻の開合分韻が確認できるのは比較的遅く、五代以降のテキストに限られる。完全な形で伝わるのは、『広韻』(1008)のみで、他は断片的にしか分からない。『韻鏡』は具体的な成書年代は不明ながら、唐末五代を下らないだろうと言われている。『韻鏡』が『広韻』に基づくことはあり得ないが、同様の分韻を行う切韻系韻書テキストに基づいた可能性はある。例えば、蒋斧本『唐韻』の入声は質、術韻を分けているから(現存する去声の方は残念なことに震、稔韻部分が欠けている)、失われた平上去声も恐らく分けていたであろう¹⁾。ならば『韻鏡』が依拠した切韻系韻書テキストもまた『唐韻』のように真、諄韻を分けるものであったと十分考えられる。つまり如上の「前稿」の推論以外の解釈の余地があるということである。

なお『広韻』において重紐韻の中で開合分韻しているのは真、諄韻のみ。重唇音として現れる唇音を開口の転図に配するという点では他の重紐韻と変わらない。

2. 仙、宣分韻

『広韻』に反映されるには至らなかったが、似たような分韻は仙韻にも認められる。韻目のみしか分からないような資料を含め、断片的な情報を繋ぎ合わせると、仙韻についても合口を析出して宣一選一?一雪(去声の韻目は確認できない)としたテキストの存在を想定できる。これもかなり晩期に属するもので、『広韻』編纂までそれほどの隔たりがなく、広く通行する時間的余裕が無かった。そうであるが故に『広韻』編纂において参照される所とはならなかったのだろう。一般に『広韻』は原本『切韻』には存在しなかった分韻の総てを取り込んでいると考えられるからである。

P2014(『十韻彙編』で略称「刊」とされる)の仙、宣韻を見ると唇音は仙韻にある。欠損部分に関し、『広韻』と対照して、各小韻の所在を調べると以下ようになる。

仙韻

宣韻

並 A 「便：口連」
 幫 A 「鞭：必連」
 明 A 「綿：口口」^①

① 『広韻』「縣：武延切」相当。「縣」はこの小韻の所属字として現れる。

現存部分で宣韻に唇音小韻が現れる例は確認できない。

ちなみに古文字の字書である夏竦『古文四声韻』（所拠テキストは北京図書館蔵宋刻配抄本）は韻書の枠組みで分類しており、そこに現れる韻目を見ると、仙-宣、獮-選を分韻していることが確認できる。但し去声、入声は分韻されていない。上声のみの、現存する中で最も古いとされる宋紹興乙丑(1114)齊安学社本では上声における分韻は認められない。改訂される中で仙-宣、獮-選の分韻を取り込んだものか。韻書ではないので、『広韻』に照らすと、小韻代表字及びその小韻所属字の一部が収録されるのみで、反切もごく一部にしか附されていない。韻書で小韻代表字を表わす○を以て一連の異体字を区切っている。これにより○ごとに文字が異なることを示している。分韻の処理についてはかなり杜撰と言わざるを得ず、分置状況は以下の通り。

| | 仙韻 | 宣韻 |
|-----|------------------|-----|
| 滂 A | 「偏」 ^① | |
| 明 A | 「縣」 | |
| 幫 A | | 「鞭」 |

① 『広韻』滂 A は「篇：芳連切」。「偏」は小韻所属字として現れる。

いずれも反切は附されていない。これ以外の唇音字は収録されていない。附言すると仙韻末尾に合口字の「全」、「泉」が現れる。両者『広韻』では船母「全：疾縁切」小韻所属。両者同音ではあるが、共に挙げておく。また宣韻の方でも開口の邪母「次：夕連」、群 B「乾」、「虔」、溪 B「愆」、影 B「焉」が見える。これらの字は『広韻』仙韻の後半部分に現れるものだが、『古文四声韻』における分韻の杜撰さとの関係があるものか？

宣韻入声雪韻が見られる P5531 は P2014 と同一書と判定されている。上田正 1973, pp.24-29 参照。その薛、雪韻残葉を『広韻』と対比してみると、以下の通り。

| | 薛韻 | 雪韻 |
|-----|-------------------------------|----|
| 並 A | 「嫫：扶列反」 ^① | |
| 幫 A | 「□：□□」所属字の「鼈鵬整慙」 ^② | |
| 幫 B | 「□：□□」所属字の「荊扒」 ^③ | |
| 滂 A | 「驚：□□」 ^④ | |

① 「嫫：扶列反」は切三、王二、唐韻にも見え、王三は「嫫：扶別反」と下字を誤る（「別」は薛韻並 B）。『広韻』には並 A 小韻は収録されていない。被切字の「嫫」は『広韻』では屑韻滂母「擊：普蔑切」小韻に見えるのみ。

② 『広韻』「驚：并列切」小韻に該当

③ 『広韻』「荊：方別切」小韻に該当

- ④ 反切を欠くが、小韻代表字を示す○が附されている。『広韻』「警：芳滅切」小韻に該当。「覽」は小韻所属字として次行に現れる

総て開口の薛韻に現れており、雪韻に唇音小韻が配された痕跡は見えない（周祖謨『唐五代韻書集存』下 pp.776-778）。

上声の選は『古文四声韻』でその断片を窺うことができるのみ。今、同様に分置状況を示すと、以下のようになる。

| | 彌韻 | 選韻 |
|-----|-----|-----|
| 並 B | 「辨」 | |
| 明 A | 「沔」 | |
| 明 A | 「黽」 | |
| 明 B | | 「免」 |

「沔」、「黽」は『広韻』では共に「緬：彌兗」小韻に所属するが、一方を省略することをせず、とりあえず両方挙げておく。いずれにも反切は附されていない。そもそも選韻に見えるのは「選」、「免」、「(於>)於：於塞切」の3字のみ。うち「於」は開口字である（『広韻』に増加小韻として現れる）。開口の彌韻に目を転ずると、こちらでも合口字の以母「兗」、日母「(資>)菴：人兗」、「輦」、「菴」（重出）、昌母「舛」が現れている。平声においても開合分置の乱れが見られたから、ここでも個々の小韻の所属を『古文四声韻』で軽々に判断すべきではない。

3. 更なる憶測

合口の韻目が四声総てに揃っているテキストが存在していたとすれば、本稿で問題としている唇音配置に関しては、一先ず真、諄韻と同様、唇音小韻は一律開口韻の方に置かれていたと想定される。興味深いことに『韻鏡』第18 転合の諄韻章母の窠字は諄—準—稔—（欠）であり²⁾、入声三等の欄には昌母「出」、船母「術」しかない（『七音略』も同様）。また第22 転合の薛韻心母の窠字は平上去入の順に宣—選—選—雪となっている（『七音略』も同様）。つまり既存の開口の真—軫—震—質；仙—獮—線—薛に合わせ、同じ声母の字を韻図から取り出して合口の韻目としたとも考えられるのである。序ながら韻書における入声の韻目は章母で統一することができなかったのも、止む無く船母の「術」で代用したものだろう。現存切韻系テキスト残巻で宣韻に相配する去声の韻目の実例が見当たらないことは或いは『韻鏡』及び『七音略』の去声の窠字が上声と同じ「選」であることと関係が有るかも知れない。この字は上声の音の方が常用度が高いから、これを去声の韻目に当て、上声を分けずにおくという選択肢はあるまい。韻図では韻書が開合で分韻していようが、いまいが、開合で別々の転図を用意せねばならない。時代を経るに従って韻書の分韻が自立的により精緻なものになって行く想定することに全く無理は無いが、ときには韻書が（早期）韻図を利用して開合分韻を行うこともあり得たであろう。『広韻』真—諄韻に於ける分韻の乱れ（合口小韻が開口韻に混じる例が多いが、増加小韻では稀に逆の場合も見られる）について平山久雄 1962 が音韻上の理由を追求しているが、分韻不徹底の反映として更なる検討を進めても良いのではないかと³⁾ 御都合主義の誹りを免れないである

うが、考えようによっては『古文四声韻』の分韻の乱れにしても、成書年代から見れば、P2014、P5531 からかなり遅れるが、字書であるが故に分韻の初期的かつ不徹底な様相を継承して、そのまま改訂されること無く、後世に伝えられたものともとれる。同書に宣韻去声、入声の韻目が見えないことも、この観点から説明可能である。更には P2014、P5531 は上、去声部分が残っていないから、四声に亙り宣韻の韻目が揃っていたか知りようがないが、『古文四声韻』に比して、より発展した分韻状況を示していると捉えることもできる。冒頭に掲げた「前稿」の推定はなおも検討の余地が十分にあると見なして良からう。

注：

- 1 王国維<唐时韵书部次先后表>(初出の書誌データ未確認。今、近年影印《觀堂集林》卷8所収に基づく)に拠れば、『唐韻』には真韻を開合分韻しないテキストと分韻するテキストがあったようである。この双方及び以下に挙げる『古文四声韻』等の韻目の異同については太田斎 2016 の注(5) pp.147-168 の一覧表及び注(25) pp.191 を参照されたい。
- 2 覆永祿本『韻鏡』では「𪗇」が見えるが、この字は『集韻』に拠る増字で、切韻系韻書では徹母字につき、該当字無しとすべきである。龍宇純 1959, p.138 の注 28 参照。『七音略』はこの窠を空白にしている。
- 3 切韻系韻書ではないが、『集韻』でも開合分韻における乱れが生じている。より大規模で、多くが合口韻に開口小韻が混じるというケースである。ざっと見たところでは真-諄(但し入声韻では逆)、痕-魂(但し去声韻では逆)、寒-桓のうちの上、去声(平、入声韻には乱れ無し)、歌-戈(去声韻には乱れ無し)など。哈-灰は平、上、去声に亙り、乱れは無いようである。『集韻』のこの現象については杜撰以外の別の成立理由を考えるべきだろう。

テキスト

- [宋]郭忠恕・[宋]夏竦《汗簡・古文四声韻》，李零 劉新光 整理，中華書局，1983，汗簡 55p.+ 古文四声韻 95+後記 9p.+索引 68p.(北京圖書館藏宋刻配抄本 1-84 頁；宋紹興乙丑(1114)齊安學社本 pp.85-95)
- 劉復等 1936《十韻彙編》，線裝 4 冊，國立北京大學出版組，臺灣影印洋裝一冊本，1963.10 影印一版
- 周祖謨 1983《唐五代韻書集存》上 625 頁，下 627-1022 頁+附表 23 頁，中華書局
- 龍宇純 1959《韻鏡校注》，藝文印書館，318 頁(底本:覆永祿本古逸叢書本)
- 楊軍 2003《七音略校注》，上海辭書出版社，348 頁

参考文献

- 上田正 1973『切韻殘卷諸本補正』(東洋学文献センター叢刊 第 19 輯)，東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター，277p.
- 太田斎 2016 韻書と等韻図Ⅱ(完)，神戸市外国語大学『外国学研究』92, pp.148-246
- 平山久雄 1962 切韻系韻書の例外的反切の理解について—「爲：蘧支反」をめぐる—，『日本中國學會報』第 14 集，pp.180-196 (特に 五 廣韻に於ける眞諄兩韻の分化條件について pp.193-196 の部分)